

# 熊大病院ニュース

第22号

Kumamoto University Hospital

熊本大学医学部附属病院 広報誌



特集1 .....P1

## 小児在宅医療 支援センター開設

特集2 .....P2

## 子どもの心のケア

イベント紹介

新任役職者紹介 .....P3

## 血液内科・膠原病内科 循環器内科 泌尿器科

知っ得!納得! Q&A .....P4

## 糖尿病早めの対策を

診療科・部門紹介 .....P5

## \*整形外科

## \*総合周産期母子医療センター

看護部だより .....P6

## HIV / AIDS(エイズ)

総合案内 .....裏表紙

熊本大学医学部附属病院

**【理念】** 本院は、患者本位の医療の実践、医学の発展及び医療人の育成に努め、地域の福祉と健康に貢献する。

**【基本方針】**

- ・患者の希望、期待、要求を尊重する医療の実践
- ・安全安心で質の高い医療サービスの提供
- ・優れた医療人の育成
- ・先進医療の開発と推進

**【患者の権利】**

- ・良質な医療を受ける権利
- ・十分な説明と情報提供を受ける権利
- ・自分の意思で医療を選ぶ権利
- ・プライバシーや個人情報が保護される権利

**【患者の責務】**

- ・自分の健康状態について正確に伝える
- ・本院の規則を遵守する
- ・迷惑行為を行わない



## 病院敷地内全面禁煙のお知らせ

皆様のご理解とご協力をお願いします。

熊本大学医学部附属病院の建物内、敷地内（含む中庭、駐車場）および病院周辺の道路は全面禁煙です。喫煙を確認した場合は、来院者には退去勧告、入院患者さまには退院や転院を勧告いたします。禁煙へのご理解とご協力をお願いいたします。

## 震災復興に向けて 支えあおう熊本

平成28年熊本地震において被災された皆さまに、  
謹んでお見舞い申し上げます。  
被災地の一日も早い復旧、復興を心より願っております。

ご自由に  
お取りください

2017年冬号

# 小児在宅医療支援センター開設

【監修】熊本大学医学部附属病院 小児科 小篠 史郎 特任講師

## 小児在宅医療の問題点と小児在宅医療支援センターの役割

平成28年6月3日、新規制定された児童福祉法第56条の6第2項の規定が施行されました。「重い障がいを抱えた子どもたちが適切な保健、医療、福祉、保育、教育等の支援を受けられるよう体制整備をなさい」という主旨の規定で、これによって地方公共団体は小児在宅医療の体制整備を義務付けられたのです。この流れの中で、熊本大学医学部附属病院では熊本県の補助を受けて平成28年12月1日より「小児在宅医療支援センター」を開設致しました。



【写真】開所式にて小児在宅医療支援センターの看板を掲げる水田病院長(中央)と中村センター長(左)

新生児医療・小児医療の発展のおかげで以前は救えなかった子どもたちの命が救えるようになりました。一方で、重い障がいをかかえて自宅に帰る子どもたちが増えています。例えば自分では呼吸することができないため気管切開をして人工呼吸器を装着したり、自分では食べ物を食べることができないため胃ろう造設術を受けて胃ろうから食事をとっている子どもたちが大勢います。小児在宅医療はそうした子どもたちに必要とされていますが、県下全域で小児在宅医療を支える体制が整っているとは言えないのが現状です。

小児訪問診療・小児訪問看護・緊急時の入院施設といった医療面では熊本市近郊は小児在宅医療を支える体制は整いつつあります。しかし、県北部・県南部など熊本市から遠い地域では訪問診療をしてくださる医師や訪問看護ステーションが見つからないなど十分な体制が整っていません。保育面・教育面では人工呼吸器をつけた子どもたちが保育園や学校へ通う際にほとんどの場合保護者の同席を求められるという問題点があります。

そうした問題点を改善するため、当センターでは人工呼吸器の取り扱い方などの実技講習会、研修会を実施し、教員、保育士を含め小児在宅医療に関わるあらゆる業種の育成を行っていきます。重い障がいを抱えた子どもたちやその家族が熊本県のどこに住んでいても安心して笑顔で生活でき、充実した医療・福祉・保育・教育等を受けられるように体制整備を行っていきます。



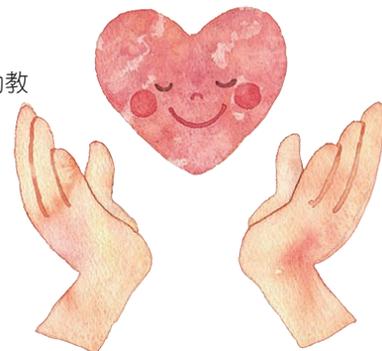
【図】小児在宅医療支援センターHPより <http://kumamoto-children.net/>

関係機関のご相談は ☎096-373-5653  
受付時間/月～金 9時～17時 E-mail/info@kumamoto-children.net

# 子どもの心のケア

【監修】 熊本大学医学部附属病院  
神経精神科 田中 恭子 特任助教

## 『心の問題のサイン』について



大人のように言葉で気持ちを表現することが難しい子どもの場合、精神的な困りごとを何らかの“サイン”として表すことがあります。その中からいくつかの例をご紹介します。

### 【サインの例】

- 1 **体調面**…頭痛や腹痛が続く、下痢や便秘が治らない、アレルギー症状の悪化、食思不振
- 2 **生活面**…眠れない、朝起きられない、食事を食べすぎたり食べなかったりする
- 3 **行動面**…乱暴な言動が増えた、同じ行動を繰り返す、万引きなどをする
- 4 **気分や情緒面**…元気がない、いらいらしている、怒ったり泣いたり気分が変わりやすい
- 5 **園や学校生活**…長期に休んでいる、活動や勉強に参加できない
- 6 **発達面**…幼い、集団になじみにくい、コミュニケーションが苦手、こだわりが強い、感覚に敏感、落ち着きがない
- 7 **精神面**…悪口が聞こえると言う、あり得ないことを信じている

これらがすべて“心の病気”というわけではありません。しかし心のケアが必要な問題が隠れていることもあります。気になる様子が長期に続く時は、子どもの心のケアを専門とする医師に相談することも一つの方法です。医療機関以外にも教育センターや保健センターなど、子どもについて相談できる窓口はたくさんありますので、まずは気軽に相談されるとよいでしょう。

## イベント紹介

一般財団法人 恵和会の助成により開催されている院内のイベント等をご紹介します。



### ハロウィンイベントを 小児病棟にて開催

2016年10月31日(月)西・東病棟8階でハロウィンイベントが開催されました。三上副院長が、可愛い衣装をした子供たちにハロウィンの由来をお話した後にお菓子をプレゼント。楽しいハロウィンとなりました。

### クリスマス イルミネーション点灯式

2016年11月1日(火)毎年恒例クリスマスイルミネーション点灯式を行いました。代表の子供たちが点灯スイッチを押すと、辺り一面光の世界に包まれ子供たちも嬉しそうに記念撮影をしていました。





血液内科・膠原病内科 教授  
感染免疫診療部 部長

松岡雅雄

平成28年7月に血液・膠原病・感染症内科教授に就任致しました松岡雅雄です。

私は昭和57年に本学を卒業して、第二内科(高月清教授)に入局致しました。当時は高月先生達が独立した疾患として報告された成人T細胞白血病(ATL)の原因ウイルスであるヒトT細胞白血病ウイルス1型(HTLV-1)が発見された頃であり、私も研修後に大学院に入学してATLの研究を行いました。留学後に病棟長、医局長を計5年間務めた後に

京都大学ウイルス研究所の教授として異動して、昨年、17年ぶりに母校へ戻って来ることとなりました。

ウイルス研究所では、HTLV-1による新たな病原性発現機構を明らかにしました。熊本大学はレトロウイルス研究の世界的な拠点となっており、今後、一層の発展を目指してまいります。また、熊本県の血液、膠原病、感染症診療の充実と発展に努力し、最善の医療を提供できるように致します。皆様のご指導、ご鞭撻をお願い申し上げます。



循環器内科 教授

辻田賢一

この度、循環器内科の診療科長・教授を拝命いたしました辻田賢一と申します。ふるさと熊本の循環器診療の発展に向け、スタッフ一同全力で邁進してまいります。

私はこれまで、福岡徳洲会病院で冠動脈カテーテル治療を、米国コロンビア大学で経カテーテル的大動脈弁置換術(TAVI)および冠動脈画像化技術を学びました。

当科の診療の特長は、優れた手術技術を有する心臓血管外科との合同ハートチームにあります。患者様の病状につ

いて循環器内科医と心臓血管外科医が議論し、個々の患者様に合った最適な治療法を選択・提供しています。

また、熊本県は全国的にみても循環器救急のメッカではありますが、当科はさらに「心臓血管センター」を立ち上げ、当院が保有する循環器専用特別救急車「モービルCCU」や「ドクターヘリ」を活用し、当科が誇る高度先進医療を幅広く県民の皆様に享受頂ける体制づくりを行っております。

当科の診療に対するご理解、ご支援を賜りますと幸いです。



泌尿器科 教授

神波大己

この度、平成28年10月1日付で、泌尿器科教授を拝命いたしました。謹んで熊本の皆様にご挨拶申し上げます。

大阪生まれの大阪育ちで、平成4年に京都大学を卒業し、京都大学泌尿器科学教室に入局いたしました。これまでの人生のほとんどを近畿圏で過ごしてきた生粋の関西人ですが、今回はじめて九州で生活することになりました。

さて、泌尿器科が対応する疾患は、バラエティに富んでいます。代表的なものだけを挙げても、膀胱炎、前立腺肥大症による排尿障害、尿失禁、尿路結石など

の良性疾患から、前立腺癌、膀胱癌、腎癌といった悪性疾患、腎不全や腎移植と様々です。また比較的高齢者が多い疾患が多いのも特徴であり、高齢社会において泌尿器科が果たすべき役割は今後益々大きなものになると考えられます。

熊本の皆様に安定した泌尿器科診療を提供できるようスタッフ一丸となって取り組みます。また教育や研究を通して将来の熊本の泌尿器科診療を支える優秀な後進を育てたいと考えております。どうぞ宜しくお願い申し上げます。



## 「糖尿病早めの対策を」

2型糖尿病は肥満や加齢により増加する代表的な生活習慣病です。きちんとした治療を受けないで放置すると、様々な合併症を引き起こし、ひどい場合には失明や腎不全、あるいは死に至ることもあります。糖尿病予備群の方は食事や運動など生活習慣を改善することで糖尿病への進展を予防でき、糖尿病の方でも治療を続けることで合併症を予防できます。

1週間に2.5時間以上の運動

定期的な健康診断

栄養バランス



### 糖尿病とは

どんな病気ですか?

Q

A

血液中のブドウ糖の濃度(血糖値といいます)が異常に高くなる病気です。血糖値は、インスリンというホルモンによって調整されており、インスリンの働きの不足によって糖尿病が発症します。糖尿病で慢性的に血糖値が上昇した状態が持続すると、様々な合併症が引き起こされます。血糖値が著しく高い時にだけ、口渴・多尿・多飲・倦怠感などの症状が現れます。しかし軽症のうちは自覚症状に乏しいため気付かれにくく、また検診などで糖尿病だと分かっても無症状のために治療されず、放置され易い病気です。

どうして早めの対策が

必要なの?

Q

A

糖尿病は、甚大な合併症を引き起こすサイレントキラーです。放置すると、腎症・網膜症・神経障害という3大合併症、動脈硬化による心臓や脳の病気、認知症や骨粗鬆症など様々な合併症を起こします。高血糖状態が10年、15年と続くと、これら恐ろしい合併症が現れ、目が見えなくなったり、腎臓が悪くなり人工透析をしないと生きていけなくなったり、感覚低下から足が腐り切断が必要となったりと、困ったことが次々に起こります。合併症はあまり自覚症状なく進行しますが、その準備を糖尿病が進めているのです。

予防方法は?

Q

A

2型糖尿病は、糖尿病になりやすい体質を持つ人が、糖尿病になりやすいような生活習慣(食べ過ぎ、運動不足など)を続けることによって発症します。エネルギー過多にならぬよう食べ過ぎを控え、栄養のバランスにも気をつけましょう。日常生活での活動量を増やすとともに1週間に2.5時間以上の運動を行い、肥満にならないようにします。これは糖尿病の予防にも治療にも有効です。定期的な健康診断などで血糖値を知ることが重要です。異常が見つかったら、かかりつけ医か最寄りの糖尿病連携医を受診して下さい。

## 整形外科



▲水田博志教授

骨、関節、筋肉、腱、神経など、体を支えたり動かしたりする仕組みを運動器と呼びますが、整形外科は運動器の病気や外傷に対する診療を担当しています。高齢化の進行で腰痛、膝痛、肩こりや骨粗鬆症に悩む人が急増する一方で、スポーツ人口の増加に伴いスポーツによる外傷や障害も増

加しており、整形外科に対するニーズはますます高まっています。

当科では、専門診療体制を整備し、それぞれの疾患ごとに専門医が診療に当たっています。薬物治療や運動療法（リハビリテーション）などで十分な効果が得られない場合には手術が必要となることもありますが、関節鏡や内視鏡、また顕微鏡などを使って患者様の負担がより少ない手術法を選択し、日常生活やスポーツへの早期復帰ができるように心がけています。また、他施設では困難な骨・軟部悪性腫瘍や癌の骨転移の治療、病的低身長、脚長不同症、側彎症などに対する手術治療、血液介在性感染症例の手術治療などにも積極的に取り組んでいます。

## 総合周産期母子医療センター



▼MFICU  
母体・胎児集中治療室

▲NICU  
新生児集中治療室

周産母子センターは、昭和43年4月に全国に先駆けて設置された中央分娩部を改組して平成14年10月に発足しました。発足後も熊本県における周産期医療提供体制の要求に答えるため増床と機能強化を行い、23年3月には母体・胎児集中治療室（MFICU）6床、NICU12床を備えて県内2施設目の総

合周産期母子医療センターに指定されました。

現在のセンター長は片瀬秀隆教授（産科・婦人科、兼任）で、周産期医療、新生児医療、生殖医療の3つの専門領域を設置しています。小児外科・移植外科・脳神経外科とも連携し、さまざまな先天異常の手術を扱うほか新生児肝移植にも対応しています。さらに体外受精・胚移植や出生前診断も行い、妊娠から出産、成育まで幅広く扱うことができる施設です。

年間に扱う分娩数、新生児数は400例ほどですが、そのほとんどは高リスク妊娠・分娩であり、年間200例近くの母体や新生児の救急搬送を受け入れています。熊本地震で熊本市市民病院が機能を喪失してからは、NICUが15床に増床され、熊本県における周産期医療の要となっています。



## HIV / AIDS(エイズ)

レッドリボンは、あなたがエイズに関して偏見をもっていない、エイズと共に生きる人々を差別しないというメッセージです。

HIV/AIDS(エイズ)というと、感染する怖い病気というイメージがありませんか？

HIVに感染すると免疫力が低下しエイズを発症します。しかし、現在は治療が進歩し1日1回1錠の薬で免疫力が低下せずにHIVをコントロール出来る慢性疾患となっており、普通に社会生活を送ることができます。また、HIVの針刺し事故による感染率は0.3%とB型肝炎ウイルス(30%)やC型肝炎ウイルス(3%)に比べると低く、性行為以外の日常生活で感染することはほとんどありません。(図1)

図01 こんなことでは感染しません

HIVはとても感染力の弱いウイルスです。熱や水に弱く、空気感染もしないので、感染者との性的接触や血液の接触がなければ、日常生活の中で知らずに感染することはありません。身近に感染者がいても、今までと変わらない態度で接しましょう。



念のため血液には気を付けて！

血液がつきやすいカミソリや歯ブラシ、ピアスなどの共用は避けましょう。



HIVの感染経路は性感染・血液感染・母子感染です。HIVは血液・精液・膣分泌液・母乳に含まれており、それらが性器や肛門、口などの粘膜や傷口を介して感染します。健康な皮膚からは感染しません。そのため、コンドームの使用で感染を防ぐことができます。全国の統計でみると、熊本も同じで男性同性間での感染が一番多く、異性間での感染も増えています。また、現在、HIV感染者の増加は主要都市部では緩やかになってきていますが、熊本県など地方都市部では増加傾向にあります。

HIV感染者は、治療の発展により長期生存が可能となり、高齢化が進んでいます。そのため、通常の高齢者と同じようがんや生活習慣病を併発している方がいます。また、1980年

代に血液凝固因子製剤(非加熱製剤)の投与によりHIVに感染し薬害被害にあった血友病の方々も高齢化が進み、血友病性関節症の悪化や止血コントロールなどにより在宅での援助が必要となってきています。しかしながら、未だにHIVに対する社会の誤解・偏見があり、不安な思いをしながら生活をしている方が多くいらっしゃいます。

当院は、HIV/AIDS診療中核拠点病院として、県内におけるHIV/AIDS医療提供体制を整える役割を担っております。そのため、日本エイズ学会認定HIV感染症看護師が、熊本県内のあらゆる医療機関や施設などで医師、薬剤師、MSW等と一緒にHIVに関する勉強会を開催させていただいております。また、訪問看護師の方々への研修や実習受け入れも行き、HIVに対しての誤解や偏見が少しでもなくなることを目指し、HIV感染者の方々が安心して地域で暮らしていけるように活動しています。

HIVは予防出来る病気です。また、早期発見・早期治療を行うことでエイズや治療による症状が軽減されます。保健所では無料で検査・相談が出来ます。まずは相談し、必要時は検査を受けてみて下さい。(図2)

図02 HIV 検査について

